



第457号 「がんばろう、日本！」 国民協議会 機関紙

発行所「がんばろう、日本！」 国民協議会 発行人 戸田政康 編集人 石津美知子 http://www.ganbarou-nippon.ne.jp (東京事務所) 東京都千代田区九段北4-3-16 サンライン第14ビル6階 〒102-0073 TEL 03(5215)1330 FAX 03(5215)1333 (発行所) 東京都東大和市南街2-17-16 パピルス会館 〒207-0014 TEL 042(566)2950(代) FAX 042(566)2949

# 民主主義をバージョンアップするための 確信を語ろう

## 「いのちの世話を人びとが協力してなす技」としての自治と「議論による統治」をつなぐ

6月18日のシンポジウム(詳細は20面参照)のテーマは「民主主義のバージョンアップ」。そのための起点となるであろう点について、考えたい。

### 弁解ではなく、確信を語る

イギリス国民投票、アメリカ大統領選と、先進国政治の乱気流が続く中、フランス大統領選は、開放経済と移民包摂に積極的で国際協調や欧州統合の重要性を正面から説くマクロン氏を大差で選出する結果となった。

これは、「国際政治における新たなトレンドを裏付けた。どの国においても、最も重要な政治的分断はもはや左派か右派かという構図ではなく、国家主義者か国際主義者かという構図になった」(キデオ・リックマン 日経4/27)とこのことでもある。「既存政治の機能不全や「やせ細る中間層」「先進国リスク」といった問題に、国際協調・国際主義の立場に立つて向き合うのか、それとも国家主義の立場に立つて、国境の壁を高くすることで向き合うのか、それが問われるという点だ。この転換をもたらしたものは何だろうか。人びとの不安や不

満の高まりに対して、「知識人ですら、反自由主義的ポピュリズムに『理解』を示し、ひそかに迎合する中」(遠藤乾 東洋経済オンライン5/8)、「マクロン氏は11人の候補者中唯一、開放経済と欧州統合の意義を堂々と肯定し、そのうえで選出された。つい10年ほど前に、欧州憲法条約が国民投票で否決され、その後遺症が残る国で話である」(遠藤乾 朝日5/25)。

ここに立脚すべき強い「確信」がなければ、乱気流を乗り切ることはできない、ということだ。それは例えばまちづくりをめぐる地域の議論の場で、どんなに有能なコンサルによって的確な現状分析と方向性が示されたとしても、そこに「思い」がなければ人びとを動かすことはできない、ということに通じる。「思い」があって、人びとが動くからこそ、合意形成のプロセスが動き始める。当然、思いも立場も意見も利害も違う人びとのなかでの合意形成は、時間も手間もかかる。その紆余曲折を一步步つ進めるためにも、「思い」を繰り返し共有することが大切だ。その過程で、「思い」は「みんなの意思」になっていく。それがあれば大きく道を外れたり、修復不能な分断に陥る可能性は低くなる。それがなければ、目先の個別的な利害に不断に揺さぶられ、はじめは小さな食い違いが分断と対立の芽に転化するところになる。そうしたいわば、拠って立つべき確信をどう持つか、が問われているのではないか。

民主主義のバージョンアップとしてののは、たんなる制度や仕組みの改変の話ではない。民主主義の価値をめぐる問いに真剣に向き合い、その過去・現在・未来のなかから共有すべき価値を磨いていくことだろう。そこに弁解は不要だ、必要なのは確信なのだ。

組みの改変の話ではない。民主主義の価値をめぐる問いに真剣に向き合い、その過去・現在・未来のなかから共有すべき価値を磨いていくことだろう。そこに弁解は不要だ、必要なのは確信なのだ。

価値をめぐるといって、他人事ではない。安倍政治の下で、民主的な統治プロセスがいかにないがしろにされているか、挙げればきりが無い。もちろんそれに対する抗議行動も必要だろう。だがそれは安倍政権打倒だけで済むことなのか。もっと根本のところ、民主主義の価値について共有するところから組み立てておくことなしには、民主主義のバージョンアップにつながることはできないだろう。遠くに眺むためには、後ろに下がらなければならぬ。

私は行政学者ですから、地方自治について制度や組織の話

を長年やってきました。もちろん今もそのレベルでの改革も必要なのですが、最近はずっと根本のところ、自治のあり方を再構築、バージョンアップしない

と、述べてきました。民主主義の価値をめぐるといって、他人事ではない。安倍政治の下で、民主的な統治プロセスがいかにないがしろにされているか、挙げればきりが無い。もちろんそれに対する抗議行動も必要だろう。だがそれは安倍政権打倒だけで済むことなのか。もっと根本のところ、民主主義の価値について共有するところから組み立てておくことなしには、民主主義のバージョンアップにつながることはできないだろう。遠くに眺むためには、後ろに下がらなければならぬ。

(発行所)  
東京都東大和市南街2-17-16  
パピルス会館 〒207-0014  
TEL 042(566)2950(代)  
FAX 042(566)2949  
〈郵便振替〉00160-9-77459  
「がんばろう、日本!」国民協議会  
ゆうちょ銀行 019店 当座0077459

1部 300円  
定期購読 半年2,000円  
一年3,500円

### 今号の紙面

- 23面 一灯照隅 地方議員のコラム
- 36面 囲む会／都議選をいかに戦つか
- 712面 囲む会／地方自治を考える
- インタビュー
- 1214面 新潟・市民と野党の共闘／佐々木寛・新潟国際情報大学教授
- 1519面 外交・安保／佐橋亮・神奈川大学准教授
- 川島真・東京大学教授
- 3・11から六年

と物事は動かない、そのギリギリまで来ているのではないかと、という思いが強くなっています。

最近『ポピュリズム』という議論がありますが、東京都政では石原都政の成立をめぐることも、そういう議論がありましたし、その前の青島都政も『人気投票云々』と言われたりしました。そういうことが繰り返されつつ、劣化しているんじゃないか、という感じもあります。

これは一つひとつの現象を批判しているのではなく、なぜそうなるのか、というところからどう構えていけばいいかというのを、もう一度組み立てなおさなければいけない、そんな時点に今立っているのかなと思っています(「廣瀬克哉・法政大学教授 本号7-12面)。

「民主主義を単なる政治のやり方だと思っはまちがいであります。すべての人間を個人として尊厳な価値を持つものとして取り扱おうとする心、それが民主主義の根本精神である」。これは、1948年から53年まで、中学・高校の教科書とした使われた「民主主義」のなかの一文だ。この復刻版(幻冬舎新書)を編集した西田亮介氏(東工大准教授)は、同書の解説でこう述べている。

(18歳選挙権を受けて総務省と文科省が制作した教材は)「政治や選挙の基礎知識について端的に記述されているともいえるが、ここには価値をめぐめる問は登場しない。見事なまでに教

科書的である。なぜ民主主義を

学ぶ必要があるのか、民主主義と憲法の関係はどのようなものなのか。近代日本にどのような民主主義は定着してきたのか。日本の民主主義の固有性、短所、長所とは何か……。このような価値に関する問いと向き合わずに済むように、巧妙にデザインされている。(これらが政治的にセンシティブなものであったとはいえず/引用者)こうした問いこそが、民主主義

や政治と向き合うモチベーションの源泉となる。価値をめぐめる問いを抜きにして、日本における民主主義の質感や手触り、固有性を語ることはできません、また政治的な志向も自覚できないだろ

「価値をめぐめる問いに向き合わずに済ませてきた民主主義とは消費者民主主義であり、それは「消費者として公共サービスに依存することが当たり前の社会だ。その「依存して生きられる社会」が、いよいよ限界を迎えつつあるなか、私たちは民主主義をめぐめる問いに向き合っ、そこから構えなおしていへべき地点に立っている。その足元は自治の現場にはかならない。

「介護サービスの消費者として、そのサービスを買えるお年寄り、消費者として自分の生活の質を買うことができず。それができる消費力がなくなる」ところは傷んでくる。傷んだ人の割合が多いコミュニティで、まがにまがに荒れていくというつらさが進んでいく

き、でも本当にまちをそういうふうに使って捨てていって大丈夫ですか、みんなが不幸になりませんか、そうならないためにどうしたらいいんでしょうか、何ができますか、というコミットメントが自治体を動かす仕組みであると考えるとき、それは民主主義の政治制度の中で動かしていくしかないわけです。

だから投票だって、行かなくちゃいけないのだと思います。中略/理念をお説教するのではなく、このまちで生きていくことの「宿命」として、どんなふうにも振る舞うのが大人であるか、そういうたしなみとして民主主義を再生させないといけないんじゃないか、そういう主権者教育をわれわれは求められているのではないかと、感じて

います(「廣瀬先生 前出) 依存するのが当たり前という「豊かな社会」の消費者民主主義のライフスタイルそのものを見直し、「いのちの世話を人びとが協力してなす技」としての自治(「廣瀬先生」というライフスタイルへと転換していく)から、民主主義を再生させる。迂遠のようにみえるが、それが主権者運動の歴史的な役割だろう。

### 民主主義の足場はどこまで固まっているか

問われているのはポピュリズムの是非や危険性ではなく、ポピュリズムの波に足をすくわれないように、民主主義の足場が固められているのか、ということだ。

石川(憲法について)議論の自由度が増したのは確かですね。でも、肝心の「憲法への意志」がどこにあるかと考えると暗たんなる状況です。支える意志です。『憲法への意志が憲法の規範力を支える』日本の場合は『憲法への意志』が、9条とその支持層に限りており、

憲法の核心をなす立憲主義の本体が、それによってのみ支えられるという構造になっている。他方で、いたすらに憲法を敵視する復古的な勢力だけが、依然として改憲への「意志」を持っている。この状況でもかまわないうような立場を取ると、立憲主義そのものの否定に加担することになると思います。そうやって憲法の根幹を奪われてしまふことへの危機感が、『真ん中』には感じられません。もしそこに、立憲主義の敵を退ける強い「意志」を見出せる状況ならば、9条の是非を視野に入れた、より広範な憲法論議が可能になりませんが(「石川健治」毎日)。

立憲主義を支える「意志」とは、どういふものか。「立憲主義は独裁国家ではない、現代民主政国家にとってのグローバルスタンダードでもあるが、その核心は「法によって国家権力を構成し、制限する」という点にある。ここで強調したいのは、国家権力を構成するところから、すなわち複雑化する現代社会で『国民』を形成する政治プロセスを生み出すという憲法の働きである(「宍戸常寿 正論6月号)。

「国民」とは、あらかじめ一枚岩のまとまりを形成している存在ではない。とくに現代社会は多様な利益、価値、世代、地域、信条などの違いのなかで、それを調整しバランスをとる。この繰り返してあり、政治プロセスもまた、こうした利害や立場の違いを調和させて(多数決至上主義ではなく)合意形成を調達していくものにはかならない。

こうした「議論による統治」(三谷太一郎)における当事者性の涵養と、「いのちの世話を人びとが協力してなす技」としての自治における当事者性の涵養を結びつけ、その結びつき

◆第29回 戸田代表を囲む会 in 京都

「住民自治と財政民主主義」

6月21日(水) 午後6時30分より ハートピア京都 会費 1000円

報告と問題提起 川勝健志・京都府立大学准教授

「これからの自治を考える～米国の先進自治モデル・ポートランドの事例から」

ディスカッション 川勝・准教授、泉健太・衆議院議員、隠塚功・京都市会議員

■問い合わせ 03-5215-1330



とだろう。「これだから、復興特需で支えられてきた、地域の本当のスタート」とは、マルゼンさんの言葉だ。

石巻の夜

夜は津田水産さんの段取りで、「石巻20」での懇親会。石巻には、震災前に戻るので



はなく、「世界で一番おもしろいまちを作ろう」と若い店主をはじめ、さまざまな人が2011年6月に設立した。津田水産の津田祐樹さんの目利きで仕入れた材料で、朝からお母さんが腕をふるったごちそうが並ぶ。骨までやわらかいさんま、たこのからあげ、いかの煮物、「ほやおやじ」こと三陸オーシャンの木村さん提供のほや、そして鮮度バツグンの刺身などがある。

漁師にはなくてはならない船大工・佐藤造船さん、雪すべり塗料の自社生産再開をめざすアテインの川又さん、さらにセキユリテの小松社長も加わって、にぎやかな交流となった。

この場を盛り上げたのは、ファン্ডの立ち上げにもかかわった仙台のNPO・ファイブブリッジの畠山さん。ここでの人と人とのつながりが、震災後1ヶ月あまりでのファン্ড立ち上げに結びついている。

津田さんは仙台のファイブブリッジで活動した後、石巻で実家の家業を継ぎ、震災後は「石巻の魚食文化を支える」と、加工や飲食店展開にも挑戦。漁業を「移れる」「かっこいい」「車

新的」の3K産業にすることを目指して、フィッシャーマンジャパンを立ち上げた。二後の「新しい現実」を創りだしている人と人とのつながりの方に、改めて強く心を揺さぶられる。

東松島のり三昧

翌日は東松島へ。東松島はのり養殖がさかんところで、毎年、塩竈神社で行われる品評会で何度も受賞を果たし、皇室に献上されている。

「のり工房矢本」は、のり養殖漁師の奥さんたちが、スーパーで買えないような漁師直送の商品を作ろうと立ち上げた。震災で家も工場も船も全て失うなか、お客さんや取り引き先の応援を受け、事業再開を決意。

お話を伺った東松島のアンテナショップ「まちんど」は、「東松島食へる通信」の拠点でもある。ショップには「東北食へる通信」で取り上げられた相澤さんの海苔と、「東松島食へる通信」といっしょに並ぶ。

移動のバスに合流してくれたのは、星のり店の女将さん。今年の品評会で準優勝し、皇室献上のために各宮家に納めて来た。震災後、6漁期続けられてきたのはファン্ডをはじめ、背中を押してくれるみなさんのおかげと。おみやげに、皇室献上と同じ海苔をいただいた。

「残るのは人」という覚悟

最後に訪問したのは塩竈市のお茶屋、矢部園さん。矢部園さんも大きな被害を受け、再建を断念することも考えたが、「北限のお茶」である伊達茶を全国に伝え、生産者を支えたいと再建を決意した。

新店舗で営業を再開している矢部園さんだが、大きな課題は駅周辺の再開発。地権者が60人



以上というところで、4年かけて合意形成を進めてきた。その苦労は計り知れないものがあるが、自分の生き方、背中を見せたい以外にない。なかでも大切にしてきたのは、次の世代に負の遺産を残さない、次の世代が壊しやすいまち(時代のニーズに合わせてまちを作りかえる)、残すのは人だ、と。

再開地区に立てた看板には「覚悟」の文字。ここに込められた思いを、しっかりと受けとめたい。

\*セキユリテでは、熊本地震被災地応援ファンズ(半分寄付)も募集中。https://www.secureit.

一面から続く

よって、それぞれをさらに豊かなものにしていく、そうした民主主義の循環をひらきたいものでもある。

\*

政治家に「確信」を求めるのは「ないものねだり」だが、空虚な言葉をふりまく政治家には事欠かない現状のなかで、せめて「あったものをなかったものにはできない」というオープンな都政運営への転換へはじめてみたいものだ。